新田義貞功臣録 七

へ13
205
7

東京帝国大学

和漢

特別 和漢 87

二勇不圖殺讐敵話

一討避進遭忠臣話

話説當時人々一所よりとゝ。高議做よりん。今我們の身ハ行よ所なく。帰ハ家なく。進退此よ極りゝ。奈何とも没理會の付なり。云何とゝ評議區々なる處ハ。岳司進こ生ゝ云ひけれハ今此危急の時よ臨て。迂遠の事を論ずるハ。真人の告もあるなれバ。弘四郎を頼ませまゝ如ゝ。さひなる此山上ハ彼が山塞よりなれバ。明あ我ら彼所よ往ゝ。其虚實を窺ひ縁故を説ゝ。太郎を此所へ倶ひ来めべと云よ。人々大ハ暁了。我曽不圖禍ハ遇心神輾轉ゝ新ふより。此良計を忘れたり。足下ハ何厭ひ明日ハ彼處ゝ到ゝ宜ゝ事を計ゝ人と

高議これを決定けるに渾我分の心底をふ〳〵けり。此時人〳〵夜に入て
更めて。旅の労さに出めれば寐るに枕もとに。惠仲は思慮深
たるものなれば。さらに宿れるけしき。主の容貌甚怪〳〵と想ひ出るに
今人〳〵の労に睡れる底着く〳〵胸間に想ひ出す。當初治し世あるも旅
寐の夢を結びうるを考るに。ひるがへすもの今此乱をする時ぞ
わゝふ。如斯處に宿りめれば隄防心のあるべきと寐もやぞ
ありけゝる。既に其夜も四更に成ぬとおぼしき左側主の僧。甚恐びせる
出来〳〵。人〳〵の睡るに乗じ模様を窺ふぞ。惠仲をとゝのを着く
まれでさればこそ想ふに差ぶる曲者なれ。畢竟彼甚事をも倣らんと
推睡〳〵窺ふ。彼僧少刻是方を着一着。忽地身を躍〳〵外の方
へ立出るを惠仲密に跡をゝ〳〵て尚其事を見ゝふ。驚とおぼ〳〵腰

より一管の笛をとり出し三四声吹響かすと均〳〵忽然として甚だ此所
の林の裡より八九個の大漢子各ゝ武器を持て頭を並渾一所に寄
集〳〵何事にか私語を惠仲窺ひ見るに慌忙〳〵原の處を走飛り声
ありたて。やよ人〳〵よ偷兒の入まぬぞや起出すべと呼ばゝ咸愕然と
ゝ〳〵一跳驚魂うちゆも。八郎五十熊の両人はかゝと起るを枕上に
太刀をとりそばめ外の方に踊出るを。豈図〳〵雲霞の如く甚老實げに着くほれ
僧の法衣の袂を結びかけ〳〵難辯し身を一具の抹胸に穿まを一振乃
眉尖刀を携猛く勇める光景あて。悪鬼のごとく偷兒等に指令し
ける。此方を見つけ斬入ぬるを着くければ暫時もなるべき二人
一般に斬〳〵蒐るに賊もまた逆ひ合〳〵闘戦へども原来武藝に秀
〳〵る八郎五十熊横衝直撞散さふぢしも勇猛み着くは偷兒に

主僧笛を吹く
盜賊あつむ集

二人の馬ヲ斬立られ咸一齊ニ逃去りしが。さすがに首領ともぼしき土
の僧と。甚勇猛げなる二人の賊逃行群の中より立ち出て戰ひ。
可憐とも賊戰數合なりがたく。二人とも枕をならべて討死をなしかたく
けるべし五十熊八郎の二人へ大ヲ勢ひ成得て。尚逃行賊を討ふむと蹤
跡襲ふ追行ぬ惠仲これを着て只顧制止むといへども耳聾
人のごとく顧もせず馳行べし。ちれ我柱むるヲ術なく若二人が身ヲ過失
あらんヲを懼る。同じく跡ヲ從ひ追ふ。夏既ヲ六七町ばかり
猛ちその去向成先ひられば今ハ是すぐなりとて飯ぐべしと。二人
うち連ぐちて着来り路を索めぼ。足ヲはうせて行歩しが。この處ハ名
ヲ一ヲ禁名の山服ヲ。極て嶮阻の悪路ヲ殊ヲ朧夜のゆえ
ぞ濛々として東西ぐふ〻〻本なく遂ヲ途を失ちてなつかぬ山路ヲ徑

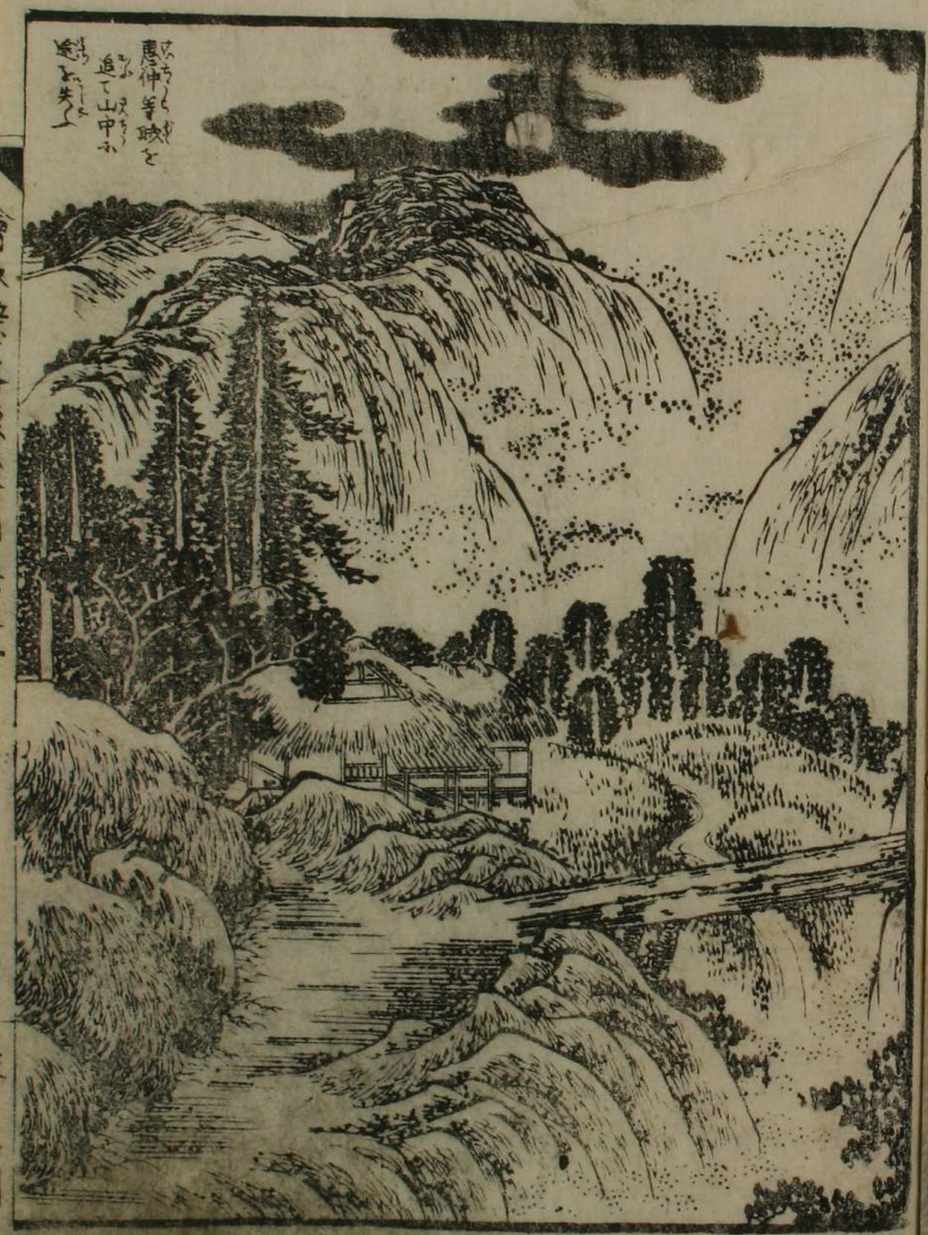
過ぬ。ちに歩めども麓へ出ること能ぶれば心せき氣息労て喉渇き腹さへ
空くなりほとほとに歩もなやめれば。ちづ喉成渇し渇を凌て再び途を索
むべしと。泉ある方を尋めるヲ。溪を蘭て遥ヲ處ヲ一軒の草屋あり。
火の光幽隠ヲ着て水の音幽ヲ聞へあるヲぞ。二人ハ首を挙て是を望て大
ヲ喜び溪ヲ下り崖を攀て其門ヲ至り叫門を乞へれども人住家とも
着へあるぐふ只一声の應答ぐよせざれば入ぐ紀ヲよりて。蜜ヲ裡の光景成
窺つぐ来門の世を避とこれ廬とおぼし。庭のかたてあぐ心ヲく覚
山水をはるかされ成瀬盤ヲ流くちる水音の甚さへいとれヲぞ十分渇
迫りめる八郎。五十熊高幾ヲの渇成歩。今ハ堪ぐ成中ちるくはしや主
の出来て登ぐるとも甚時縁故を陳て謝すれヲ。ぐ〻ろ饒さぐ成
せあるぐ成ろと門扉を披て裡ヲ入り覓の下に至て櫃ヲその水を

飯はん。主や出〳〵と一盞茶時休らひ〳〵候てりしが。さて〳〵み出まゐ人のるこ
とゝゝ甚怪〳〵ふ。家裡ハそゝくそのゆゝを着るふ孤燈空〳〵席上を照
し。蟋蟀寂とし壁間ハ嘆ぎ。只一個の人影ぞふるゝ厨の食架ハ大
きなる竹器ハ幾許の餅を盛甚傍ハ一瓶の酒と一椀の美と有さま
あぞ飢よ望あは八郎五十熊是何〳〵事ぞ。ちよゝ〳〵喜び。ひと
ほと食ぬぞ。しかる所惠仲慌忙〳〵。これを拄〳〵云ら〳〵。そハ漫りハ
食ひのそ怪〳〵ぬ事のあるべきを我熟〳〵此家のゆうを窺るハ
席上ハ塵埃蒙ふて爐中ハ蜘網濃ゆるれハ常ハ人住家とも
おぼゝ又先刻ハ家の後よりゆにハ一個の深き坑あり其底を望着る
ハ屍累〳〵てあれハ此處ハ必さく賊の巣穴ハ近き所はゝ旅客を
ゝ〳〵ハ偽り惑ぬ。食の中ハ毒を設け置これを食〳〵めゝを下〳〵

殺さんずるハ計策なるべしハ。我們今既ハ此陷井ハ陷入るられまゝれば
よ〳〵や毒ハ死せざるも此所を逃れ〳〵甚難し。ゝあれど我又賊の謀
ハはゝして脱るべきの策を設けり。足下ハ今這般〳〵做るべこれ城
避ゝ〳〵城得べしと云教ゆるこば。二人喜ひ心を得〳〵俄ハ家のうしろなる
坑より。容貌の似ぬ〳〵ゝ〳〵なれ屍を早未〳〵各指ハ裂〳〵その血を
りて面ハ灌ぎ。尚衣服を脱ぎ〳〵ち着せ厨ハあれ酒食をその前ハ
列ね置全〳〵毒ハ中り〳〵死〳〵ぬ。換様ハ〳〵てなし。二人ハ相〳〵梁の
上ハ躲賊の来〳〵を窺ひぬ。〳〵不過時ハ外の方人足の響〳〵〳〵数十
個の賊入来〳〵此光景を一看つ。ゝる呵〳〵笑〳〵云斯ぞりけ荒とのと
謀〳〵ハ易かりけるとしひあひ〳〵衣服調度を奪ひ〳〵屍をハ後の坑
ハ投捨又此所ハ輻湊ゝりさり。時ハ首領〳〵おゝ〳〵賊の云りけ〳〵近頃

畠山道誓同尾張守。江戸修理亮の三人鎌倉を追われ暫く我内に
方々左遷されしが去頃より我部下となれりしを畠山と云識らぬ彼
の寺に居らしめ旅客を此所に尋ねし人に接引と做せるに前日れ獨
我と對話せる折から道誓のうしろ姿名告りてはじめて是を知り
忽ち其所に詰寄り討取君の讐を報ひぬるぞと想ひしうち二人を漏こぐ
詰めと少刻時をうつしたるが今冥不圖も此花園の内に我が
あるべき趣けれと說話を惠仲堅の上にありて詳にうちうち大に驚き其
人を窺ひ看るに去る前年禪可が旅亭に入帶刀傷く治療を
なせりしものなれば忽ち真人の告を想ひ出し船田太郎が差図と想ひ
けるに高からぬ声にて。やよ松田太郎大哥我を救ひまへと呼られ賊
將唖然として堅の上を伺ひと看るに見る大に驚きそもそも恩人

惠仲老爺には在ますや此に下りませと楷子に乘り此曹をおろし
惠仲を上座に奉板に地位を做して去年の恩を謝して后云恩人今何
の変ありて此へと来りしや且ちに何ゆえ我名をば知りしぞと宜
しく惠仲静かに德壽丸の御身のうへを問ひ。紫花真人の告を
て姓名を知るるのみぞ。おもかくし細に說話は太郎が此說話のうち
よりも断腸の思頻に双眼を潤しけるが涙を拂てうへ
ら。おい未だ說話を兼ねこのかた此年頃尋奉る主君の近き下
に在ますを神のぬ水の露もて過ゆ一とれ淺猿なれ願くは
老爺我を惹く小衙内の見参を得せしめよ是みな厚恩のなり
かと甚殷勤に頼こけるに惠仲其忠の志を感賞して云足下此
好意あるて洒家逸が德壽君に告へ見参入まるせんと。ここに


惠仲等蹴を
追て山中ふ
逃去る

娛しこのひぬをし只今洒家と偶よいざゝせまくと云つゝ八郎五十熊ゝ〻ゝく。
さゝハ渾小衙内の股肱の人くなりと知あらをれハ互ゐ姓名を名告朋友の因
ゝ〻結びゝく喜びあつゝ。斯ゝく惠仲の人ゝ〻催促太郎ゝ途の手路をせこと
彼所の寺くぞ急ぎゝる。却説這裡ゝ德壽丸をとゞめ人ゝも惠仲等の
二人賊ゝ〻追行ゝく中時を移し夜も明横雲東嶺ゐたれゝく頃ゐ及めと
ぞも皈了来ゝれハ甚放心不下想ひ危めれゐみ忽ち二人一般ゐ皈り来れ
ゝゐぞはしめて心を易かゝく其ゝ恙なゝを喜び且賊の光景ゝ〻問ゐとで
二人かつはゝく畠山道誓あを討てり事ゐり。太郎を偶ひまわるゝよ
一五一十を詳ゝ泥詰ば德壽丸ゐ是をゝちゐあひ不図仇人畠山ゐを討し
ゝく〻賞じ且尋索る太郎を偶ひ来ゐる支を雀躍喜ひたまひ。
船田をゝゐ將ゝく泰れと宣くば。惠仲心を得ゝく太郎ゝ〻偶ひ出れハ德壽

丸ゐ容貌を常ゝゐ。年紀ゐ十ばりとおぼゝく。眼秀顔色赤ゐく
東ゐの如く。自軀渾ゝく大ゐ中て天晴の豪傑と看くれハ感悦斜ゐ
おぼゝゐ。太郎も又小衙内ゝ見ゐ玉のごゝ美貌ゐ少年ゐ感し
ゐ中ゐ。眼清ゐに爛ゝとして人を射ゝく威励ゐ備らせゐ人は。
感喜に堪ず挑燈也似拜をれハ其時德壽丸の宣ゝ君臣の縁浅かゝ
ゝく。今我危急の時ゐ臨ゝく斯相奇遇ゝくハ互の父祖の霊ゝ相
惹ゝゐゝ想くば。今日より我股肱となりて忠節を竭ゝく命れ
ば。太郎かゝとはりてゝ中。故君のゝせをゝゐ後只顧君を捜索奉ゝ
ゝに近ゝ下総ゐおゐをれゝ知ゝで過ゐゝを。今日大なゝゐ僥倖を得ゝゐ新
ゝ〻拜ゝるのみなゝば。陰助ある誼意ゝ〻蒙ゝこと。我身の面目何ゝゐ
是ゐゝいゝと感涙ゐ咽ゝく喜びぬ。此時兵司と太郎ゝ素より断金の交

ありとれば相進こよりて。互ふ懐舊の情をのべ坐ふ袂を潤しけり。斯くのち
徳壽丸宜ひければ今此君臣笑壺の會を做へ正ふ是発達の時至れる
とおぼゆ且べ速ふ義兵を擧くて仇敵を討。故君の怨恨を晴し奉
らんよ。まづいかなる謀を做てうよりべき。各想ふ處を陳述べて命する
ふ誰か一人よくく口を開くこのあくまふ譲あひたまはずふ惠仲進み出て
云へりけれへ。各位のいぶかと言葉を發まるべきふ拙翁ごとき者のいふ
甚うに侮めごけるとど思ふくく云ごろふ忠なるごとしられば我愚見を述ん
ふりとべきあらば取ふ今足利家の光景ふ見るに政ふくなるべし。民
のこころをこれを厭へれなるふ分て。下総の知縣芳賀入道禪可を甚好
悪の徒ふして擅ふ其職ふほこり嫌ふ虐ふ欲ふ耽り不仁不義の政を
民これ悪めども其權威ふ懼ふ。表ふよく其命ふ服するよ似れど。

裏ふ却くこれふ乖りて今此禪可ふ討を先としるまるべ。
國人ふ單食壺漿くく。我軍ふ迎いんとふ兵司まを拍く。大
ふ喜び小人も又此こころふあり。願くは小衙内老早此計を做まくと麾め
ヤせば。德壽丸完ふおのひく宜く。二位先翁曹意の合れへ上ふ計
とおぼゆれば尚其術を示し給せて准備を做まべくと命するふ兵司
こみくられを惠仲ふ乞ど。辞こ譲りくこごろを只顧ふ催促べ惠仲ふ
事なくて云へりけれへ。拙翁が白痴なるふ術ふよりべ。水瀬九郎をして
禪可が近き辺所くにもあくく強盗を做くあば。禪可驚しくくふ兵ふ遣
くくこれを制まべし。然るこれへ其餘ふのばら空虚となるこれふ拙翁又
預く。其國人と間諜を做置ふ人の内應を期として。小衙内人くと俱
ふ禪可が舘を襲まで一鼓ふくく禪可が首ふ着まるこ。爾くく后ふ下総一國

心から味方の有とありぬるべしと利害の明かなれば磨たてし鏡のごとく辯説の爽なれば川を懸るに均しく説けるにぞ。君臣共に策畧を感賞して商議これに決しければ。太郎は徳壽丸なとゝ共に人々を已が山塞に請し多方に款待給仕ぬ。

惠仲深智得民心話
禪可多欲失一家話

且説も徳壽丸は。水瀬九郎義虎とゝもに事を發さしむべく謀りて。八郎を使として旨を含めたるに八郎は不日して馳皈り。小臣彼所に到りて九郎に遭て命の旨を傳へけるによろこび喜びかしこみて。そや彼地方をもちたら下総にまゐりぬひぬと里へ奉ければ徳壽丸甚嬉こび給ひ。然らば我もとく下総に趣くべしと人々が會ひ其部署を定めける折しも負児を袖

人々の妻子は事の定まれるほどはまづ此山塞に止め置るべし預てのたくはへなれば一人は此地に留まりてこれを守衛べしと其人を撰びけるに。這回は小街内発達の最初なれば一人として留れよと肯ぜず互に讓あへる処に忽ち一個の小賊走來りて只今此山の麓を由緒ありぬべき漢子の美貌なる女児を倶ひ過るを捉へ今此所に牽來りぬと報告に。不意時郷まであり。各いかなればそのあらんと看一看ればいかに荘輔横笛の二人なりければ。これ愕然と驚きて慌忙く其縛を解引て上座に請じ各一般に叙し礼を做すに。荘輔は只是夢に夢みし心ちして人々の此所にあれるを更にわくかたなければ其縁故を問ふに。兵司進み出て老爺の不審もあるも宜なり。我們如此々々のことによりて此山塞に足を止めぬと其一五一十を詳に云ぞて船田太郎を引合せければ。太郎素より荘輔がことを

ゆゑ知れ〳〵謹敬頓首して云我部下のその老爺を面倒ものゝ
不圖失禮を做のひぬ願くハ幸ふ饒しまくと謝めるべ莊浦とゝふ
そゞめて心を易す。前日危難の初より彼所を脱ヨ玉小衙内ふ遭ふ
も角も做ぞ〳〵と横苗を倡ひ湯香保ふ赴くべく此山の麓をゝり如
此ふ及べるまでのゆゑ子細ふ説詰べゝる其志のけゞを憐こけりこの日元
德壽丸莊浦ふ對つせのひて宣ひきれハ今小可人くの勸ふより禪可
入道を討く近頃の晦氣を散らべく策儀定りつれ〳〵も此山塞ハ護
衛ぞ〳〵人なりを愁め泰山願くハ我爲ふ此地方を守護ものひまんゆと
よりもあ〳〵ゝせのへハ莊浦心裡ふは肯せゞ倡ふ禪可を討〳〵怒りと
散らべく想へれど深〳〵ものひらゝて賴こゝ〳〵ふ辭こがくて業引めれ
ば人〳〵大ふ喜び頑〳〵定め置ふ分頭のゞ〳〵ゝ。太郎が部下三分の二を

留めて山塞を衛らしめ二分の勢をべめけゝ〳〵ふ下総ふ遣つゝ所ふよ
り金號の期至らば速ふ彼靈狐廟ふ寄来めゞ〳〵と旨を諭し是ゝ
をバ前ゞちて彼処ふ赴りめ吉日を卜得く德壽丸をゞめ兵司義忠
八郎義龍太郎武虎惠仲父子以上六人忍ゆふゞ打扮り放下一頭却
説這裏去年惠仲禪可が爲ふ搆ひとなりし村老ハ
渾惠仲が德を慕ゝ〳〵徒ゆ〳〵預〳〵交らひけるべ這回反
簡ゝ用ゆゞさゆハ好き便なりと惠仲ハ人くみ先ゞち蜜うふ其村老の
〳〵ふ屆りていうちれハ莊浦兵司が徒ハ素南山ふ由緒ありけるよ〳〵を
夢ゞうも知〳〵で親戚の因ゝ結びけるふよりて濡衣の罪を蒙る家
ゝ失ひ斯干隔湯となりそうゝべ寃罪を分疏ふよ〳〵く年頃信ド
奉る靈狐ふ身の薄命を嘆きゆせ〳〵ふ前夜明神我枕ヒふ〳〵せ

めひ〻く宜へ行ハ。這回の事い〻くゝ嘆ぜ。今南山の皇帝聖德日ふ
新ふ在さんゆゑふ。皇天感應ありて聖運再び盛んならんとゝ。
足利家の旗下のうち當國の知縣禪可が如き。奸惡甚ゝく民ぞ苦め
徒をび是を亡ゝ搗ゆ行ふ。新田の子孫賢德ある人をりく。ちゆふ
遠かゝびゝて。當國兵乱起るべし。今暫ゝ待ほど故郷ふ居ゝびといくも
ゆゝくゝふ刃の僥倖となり。後かゆふぞ福を禀ぞゝとの霊夢を蒙て
たまゝび。其神恩をも謝ゝ。且我のこ身ぞ全ふせんも本意ゆふねハ年来
ゝりなゝ交らひ奉ふせゝ人〻ゆも告倶ふ禍を脱れべく。さてこそ此処ふ
忍び来ゝとりとゆゆ行ふ。原来霊狐ぞ信ぞは村老の曹この説話を
聞ゝく忽ち嚮ふ収兵の騙されゝく。惠仲兵司おゝ一家危ふきを脱ゝ
事ゆゑ想ひ出ゝ。且惠仲が生平謡らぞれを知ゝゝ。ゝ實そとおもひ

感佩ふ堪ぞゝ〻ゝりけれい誠ふ明神の啟告の如ゝ。我们も原来望む処
なり。さるゝひ德壽丸ハ。新田の嫡家ふゆゝすゝしゆゝあるゝ且仁義備
ゝらせゝゝれハゝゝ迎へゝりゝ。禪可を責殺ゝ。これゝ代らゆ陽ゝゝせん
ゝ。甚歡ばゝ事ふあゝゝやと。衆意一串ゝゝゝりける。惠仲ゝ
裡ふハ喜べゝども。表ハ驚ゝふゝゝて再び三度止めれども。ゝら
ふ聽いれゝゝ。直ふ廻文を巡らゝ。近郷の居民を觸聚ゝふ暴の招
き何事ふやと不多時遠近の居民絡繹として。保正ゝりに輻湊ハ
村老の們ゝよゝく喜び。大ふ酒肴を調ゝ饗應酒
園ゝ行ふ乃びゝ行ゝりゝ。各位を招くゝ別事ふゝ。如此ゝ
あれハ這般々々做べゝ想ゝと惠仲が霊夢の光景ゝりゝ。おのれゝ誠
反の意ぞゝの汲を詳ふ云ゆゝあれハ素より民の愚ゝ心ふ只顧信伏ゝ

神の告といふことを聞感激頻なるに日頃虐政を擅にする禅可成
亡んぬる企なれば何の一義ふも及ばで喜び美引めるぞ惠仲ハ神の
を看て謀畧將ヨなりと想ひけるに村老ヨ對ひいふやうこの拙僧
が言葉より〳〵て事既ヨ如斯ふ及ぶれば此うへは何かくされ人〻の過失
あらざるを願えり。よりて愚なる意ぐせを陳人。〻〻ぐ〻ひ
用ひよ。今かどう多ク人〻ふ首領なく〻て猛らて乱るべ。人〻の心
ふ德壽丸ハ拒きて隊將と仰んとおぼしめ。そのの成得ぬ后の
夏ふ〻。それはぐ司どふ人なく〻て叶ひ申ずといふ村老の曹ど
めて曉て。誰をうせば。彼ハうせうとと置〻たのみふ〻さらに弁かるを
看〻。惠仲又近を出〻いふ。各位の心を労〻ふも宜なり。ちうハあれどい
はでも果〻ふ高議を做ふも又甚益ケ目ふ素我霊夢より
發ふるるひあれハ索性霊狐の神慮ふ叶せるうんハ如何と云ふ村老
昔實ふもとて。直ふ此所ふ聚會る農民ハ將〻。彼神の御前ふはと
ひ〻。叔甚事をして神多ハ何ふべと云ふ惠仲ハ云ふ難さふ
あ〻ば。今内陣より一根の幣ハ持来〻。是を此ハ〻ふる中央ふ建
置神号を命。をり〻招き作〻たるこそ則ち神あるよ叶さ
人うべ〻と云へ了けきば。みな爾り〻〻ふて其ぐ〻設做〻次第を
もつ〻幣を招げ。一人として能作〻得るものあ〻。既ト惠仲ふ做べきふ
至ヨ。少く席ハ近ふ。謹ぐ神号數遍を唱へ。一ぐ〻ふ拳〻これを振け
ば怪哉今ぐ〻少〻もあるぐ〻ふ幣のふふ應ぐて作きるふぞ人〻奇
異ふの想を做。異口同音ふ云へ〻ひ〻ハ神慮如斯あれハ速ふ首領と成
て事を司ふ〻と云つ。強〻上座ふ請〻渾一般ふ首て只顧其命を

農仲
謀
百姓を
味方あり

聽人てゝ紙乞て止ぎ茲ゝ小おかゝ只得ゝ遂ゝ捜索ふこそなきりよりて
是乎誰知人這一件恵仲人心を得べ紙鳥の頭〳〵幣の裏ゝ針を穿て
置已ゝ掌のうちに磁石を隠持〳〵招きそろふよりて。容易く仕ゝ
こそ。不在話下這裡水瀬九郎義虎小衙内の命を受ものゝ部下の徒
ゝ將〳〵下総國ゝ走わり所〳〵ゝ前徑強盗をし。攢ゝ殺掠
はれ。當國の人民易た心もゝ。諸方の縣より。知縣府ゝ訴へ多ゝ
陸續として歇時なゝし。ゝば禅可大ゝ驚て暴ゝ幾許個の捕盗使
を催促是を制し。捉へんとすれども原来猛き強盗のゝ数十人群を
なれば却〳〵捕盗使の仍ゝ死傷多く。ゝる如鼠逃のさはゝ〳〵逃ゝ
ぞ。禅可色ゝ失ひ。此後訴出ゝ何ゝて好ゝべしと其子僥太ゝ謀ゝ原
来任侠なれどこれ〳〵うち聞。おぞみ笑〳〵いゝ斯ぞりの賊紙捉得さろぞ

おうけ是素捕盗使の爛死蛇ゝ。ゝりて。不典ぞ子是遠回ゝ小可さろ對
向ゝさんゝ。ゝ討取ぞゝ紙易しく待ゝ。傍若
無人ゝ云ゝ紙ゝぞ。禅可大ゝ喜び賢子自ら往ぞ何の難ゝ紙ゝ
ぞ。ゝゝあれど餘りゝ輕んじ倫りて。ゝ紙過失ゝぞと。ゝ〳〵戒め
健ゝ紙ゝ收兵数百人を撰び。ゝ是紙僥太ゝ從ぞ〳〵。訴へ出れ方ゝ對
向んと定分頭俟てりけり。此事ゝ恵仲傳聞時ゝ至れと急ゝ
人ゝ紙會し〳〵。禅可ゝ光景を陳如此ゝれゝ支既ゝなりぬべ。ゝりて小衙内
ゝ兵司八郎ゝ。太郎ゝ部下の勢を將〳〵。霊狐の社ゝ埋伏。廣中ゝ火の
ゝりの発ゝ紙着ゝて。たちて責入ゝ又水瀬九郎哥〳〵只今此邑ゝ強
入殺掠ゝ紙ゝ。僥太のまゝを着ゝ偽走りてとれ紙小金の方
ゝ惹敵小刀根川の半を渉ゝ紙。這般ゝゝゝゝ做ゝと示。ゝ光ゝ對

ひ。如此々々儆めしと云教ありければ。みな心を得て勤るとして出来りぬ。斯て討策既にとゝのひぬれバ。當村所々にありし鐘が嘯し貝を吹鬨を揚る。全く賊の襲ひ来たれる勢ひなりけり。村老の曹ハ俄に知縣の府中に馳行て訴けるに。近頃風聲のミ聞へける強盗の只今小人等が閭里に押来り擾するに武家を殺掠す。あはれ相公の威福なるぞ。此騒乱を鎮めたまひてんと只顧願ひまをすなりぬと云へバ預ておもひまうけたる禅寺忽ちに兼引甚是しげに數多く云這悪賊近頃所々の縣が侵をことゝ屢あれバ我強くこれを追ひ失ひしに徴もせまく今也府中に近き郷里にまよひこそ易らかね。這回さず一人も漏さず討取て後の患を除べしぞに汝ら謹て引路もてせよと僥太に數百の収兵を属へて對向しむ。斯く僥太ハ百姓を前驅急ぎしが忽ち中新井の邑に至着けるハ保正が家ぞ

多くの百姓出迎へ僥太が馬前に跪きてありけれバ只今までも賊の此処にさむらひしが。小相公の来らせたまふに恐着て小金の方に走りし。老早追せまひ玉ふべからんと捉すべしと。活龍活見に述れバ僥太うち點頭。然らば汝に引路をたのむべしと此地を馳て小金の方に赴きけり。此時日既に没ぬといへども尚路をとりて急しが猛ち一帯の川辺に出づ是乃刀根川に續きたる流れにして平日に水深く舟なくて渡ることを能ざりしが今なれ事にや今宵ハ水淺くして膝をもうるほさねバ僥太大ひに喜び兵皇天の助けなりとて渡りもやらぬのどもと勇み進みつ。みな一般にうちへて中流に至り對の岸を望み眺るに怪哉乱草の裡より大きな燈籠忽然として頭を出し漸々と天空に上るとみえしが其所這所の叢より數十個の賊一齊に興起其中より仁王を作り損じたるが如き大漢子ま

小長に鎗を持てるが進み出僥太を挿拓さあざ〳〵笑〳〵云西家の是
新田の舊臣水瀬九郎と叫做的なり。先部より此地に来て敵を俟こと
久し。熟首を洗ふ〳〵我刀に受よやと。飽すでに敵を呼りれば素
より火姓短氣の僥太大に焦爆怒自ら真先に進んで渡るところ。
何を想ん遥に水声の訇〳〵と聞るほどとあれ。猛然として奔
雷の落かゝれるごとく。暴に大水激り發流る矢のごとく白浪うち揚
るに。渡てかゝりし仏ひよ狼狽早く岸に上りんとすれば。對の岸
水瀬九郎部下の勢に指揮して散〳〵に射たりはせば。這方の岸に五十
熊首將となり。近郷の農民起出竹弓に放ち礫をうち聞をはりく
責たつれば。水をさえぎり激り来るに可憐僥太がうち数百の収兵
説時遂那時悉く流され遂に葬魚腹にけり。是渾て惠仲が謀計

に九郎を〳〵僥太に向の門に引きいれさせ。はと一面に農民
を催促この流の源をせき置高燈籠の上に旗を〳〵一時に焼きを
毀ち〳〵ようして斯容易く討得たり。却説也這裡に惠仲預て
利を徒を禅可が衙府に忍ばせ置僥太が遠く走れをこそ暴に火
に放つべしと云教へ。此時彼曹今はいとや。時分よしとおりし預て准
備を做ける其所の軒彼処の庇に火を放ちさかよ折ふし風烈
して火燬〳〵として焼揚るに。これに號と定めおけば。德壽丸を
兵司大郎を卒ひ其勢百余騎に〳〵禅可が敵の前門に進このは。
惠仲八郎と倶に六七十騎の勢に將く。後門の方に對ひ両勢にて
や否鐘を帝〳〵敲に撃開を揚く責〳〵禅可を只今の失火に
慌忙〳〵狼狽に慌ふ也不図敵の暴に責るに。さいく〳〵にとなりく狼狽

十九

十八

敵に防げ火に援へと下知を做せども。健士なれども。焼太ふ從ひ
行く残るものとて六老老毛漢ばかりは膿包的のくゐくそぐ〳〵防く
事能はざれば禪可今ハ没理會自ら鎗にとんで前後の敵に向らと
すれども火ハ燈燈ふ焼上るこそ。防ぐ術なく此上ハ一すじ此所に脱と生
焼太と一所ぬなり計策をはらめて。會稽の恥に雪ひぐ〳〵と思惟に
変辛ふして囲を脱。五六町も走りしる猛ち一坐の林の下に生る。然すで
に敵も襲ぶれハ少〳〵心に易ふして。衙府の方を顧ずして忽然
として林裡より一隊の勢討〳〵出るり禪可悄然として大ふ驚き瞳を
さぐめて看一看ふ一個の若き大将まふ一條の鎗を携へ馬に躍らせ進
出で高ふ云くりけるハいかに禪可法師楚ふ人ふ我ハ是伊ふ爲ふ妻
く恥辱を受くりし神醫惠仲ふ男兒ふ五十熊と叫ぶ做的なりいざや怨れ

双に稟よやと。鎗を捻くり突く〳〵蹇ふ禪可一縮ふなり。只是嬰兒
の雷電に笑けるごとく。魂魄も天外に更ふ一言半句の回答ふも及ばず。
鞭を揚て走んとすれふ又一隊の人馬猛然と顯れ出る前徑を遮り一個の
首將弓手ふ一個の首を提。馬まふ一振の朴刀を携へ進ふ生くりふ波近
須我る所音ふ高ぐに聽ふ眼を合せて。食ふ味ひを甘んぜず。
多く懼恐るれ。水瀬義兎なり。近くふ寄く面深よこそ又波ふ小兒
を討んとて對向りしその志のけるげさに罪作ふあれど。只今首を斬て
此ふ持来るなり。いざ對面をまべと。焼太ふ首に示ーすれハ禪可ことを
一目看くに。ちらと想ふ焼太ふあくなる光景ふ手足麻木膽消て猛ち
馬より轉び落ると。五十熊得くりと声を揚只一鎗ふ突貫けば。ぐ一声
叫び二言ともいはで死ーたりきり。ぬて五十熊その首に刎られを鎗樹ふ

刺貫こと。九郎とうち連。衙府へぞ急ぎけり。這又惠仲が謀也。五十能九郎の二人爾小僕六を川中ふ立し。其首次九郎討とりて后今也二人此林ふ埋伏し。禅可成計とりもしなと。

新田義貞軍功臣録初輯巻之二終